

紙つて

浜松航空自衛隊の広報館（エアパーク）に行くところ、一日楽しいと聞いて足を運んだ。駐車場では遠方の他府県から来た車が目に留まる。

航空機の仕様やエンジン、さまざまな機器を見ながら進むと、航空機の展示格納庫へ入る。歴代ブルーインパルスの実物の前に行列ができています。係員の説明を受けて親子連れが笑顔で待っている。コックピットに乗り込んで操縦桿を握ったり、親子そろってフライトスーツを身に着けたりすることができる。

視線を上に向けると、トリコロレの丸印の付いた木製の複製機が天井近くにつり下がっている。イタリアの偵察機アンサルドSVA19で

百年前の飛行機

好 武田

ある。「イタリア政府から日本陸軍に一機寄贈され、長く九段の遊就館に展示されていた」とある。

ちょうど百年前の一九二〇年二月、イタリアから極東に向けて飛行機が飛び立った。アルトゥーロ・フェラリン中尉ら四人の分乗する長距離機二機が、一万八千キロ離れた日本に三月月かけて到着した。この話は近年、テレビ等で紹介された。初めての海外からの訪日飛行は大歓迎を受け、一カ月半の滞在期間中、連日のように祝宴が続いたという。

最大速度は時速二百十九キロ、航続時間は三時間とある。インド、中国を経て日本へたどり着いたプロペラ機と、一九六四年の東京オリンピック開会式で青空に五輪を描いたブルーインパルス。時空間を超えて楽しい。

（静岡文化芸術大教授）

2020.2.1

2020.2.1

中日新聞（夕刊）P.1